

平成 25 年度 熊本県立大学大学院文学研究科日本語日本文学専攻

学位（課程博士）論文審査報告

論文執筆者氏名 和田 礼子（学籍番号 0865004）

学位の種類 博士（文学）

学位記番号 甲 第33号

学位授与の日付 平成 26 年 3 月 15 日

学位授与の要件 学位規程（平成 5 年 4 月 1 日）第 3 条第 3 項

学位論文の題目 従属節におけるアスペクトの研究

学位審査委員会

主査	馬場良二	本学 教授	日本語教育	博士(学術)
副査	山田 俊	本学 教授	日中比較文化	博士(文学)
副査	米谷隆史	本学 准教授	日本語学	文学修士
副査	定延利之	神戸大学教授	日本語学	博士(文学)

## 論文要旨

本研究では、従属節の持つアスペクト的特徴と、従属節の意味との関連性について分析を行った。ナガラ、テのように、複数の意味用法を持つ接続形式において、ナガラ節、テ節のアスペクト的特徴が、意味の成立と相関していることがわかった。

第1章では本研究の目的と考察の対象を明示し、分析の視点と本稿の構成について述べ、第2章では先行研究を踏まえ、本稿の日本語のアスペクト、アスペクチュアリティに関する基本的な考えを述べた。

アスペクトは「出来事の時間的展開性（内的時間）の把握の仕方の相違」を表す文法的カテゴリーで、従来、日本語のアスペクト研究は、スルーシテイルといった形態論的な対立に基づくアスペクト的意味の対立を中心に研究が進められてきた。アスペクト研究のもう一つの流れは、共起する副詞成分、補助動詞などによって取り出される運動の局面に着目し、動詞が語彙的に持つ語彙アスペクトについて分析するというものである。幅のある時間を表す副詞成分との共起の可否による動詞分類も行われている。

このようなアスペクト研究の流れの中で、本研究では、スルーシテイルの形態的対立を伴わない接続形式によって構成される従属節におけるアスペクト的意味を分析したという点に特徴がある。動詞が語彙的にもともと持っているアスペクト的特徴の中から、文脈の中で取り出される運動の局面について言及し、これと、従属節の意味との関連を明らかにしている。

具体的には、第3章で、ナガラ節のアスペクト的特徴にもとづき、ナガラの用法を「逆接」と「付帯状況」とに分類した。「付帯状況」の用法では、ナガラ節のアスペクト的特徴は「継続」「変化結果の維持」「反復」で、主節との時間的關係は「同時」を表す。「逆接」の用法では、ナガラ節のアスペクト的意味はパーフェクトで、ナガラ節は主節に先行して動作・変化が終わり、その効力が主節時まで続いている。また、付帯状況のナガラ節はとりたて詞「サエ」や「ハ」によって焦点化され、動詞句内に生起するが、逆接ナガラ節は、動詞句内には生起しないという構文的特徴を持つことを見た。「付帯状況」ナガラの中には、文脈によっては、主節との接続関係が逆接となるものもあるが、このような逆接は「文脈的逆接」とし、ナガラ節がパーフェクトであるというアスペクト的特徴をもつ「構文的逆接」のナガラと区別する。

付帯状況ナガラ節のアスペクト的特徴は、「動作の継続」か「変化結果の維持」である。ナガラ節のアスペクト的特徴は、動詞が語彙的にどのようなアスペクト的特徴を持っているかによって異なる。また、「継続」「維持」「反復」の局面を表すには「時間的な幅」が必要となる。

「変化結果の継続」を語彙的に持つ動詞にナガラが接続しても、付帯状況の文としては不適格であるが、「変化結果の維持」を語彙的に持つ動詞にナガラが接続すれば、

付帯状況のナガラ文を作ることができる。変化結果を維持するためにはエネルギーの注入が必要で、このことから「変化結果の維持」は、動的な場面であるといえることができる。

逆接ナガラ節の aspekto は、スルーシテイル形式で aspekto 対立のある動詞の場合はパーフェクトを表す。ナガラ節の aspekto 的特徴がパーフェクトである場合、ナガラ節の事態は主節の事態に先行して実現する。限界動詞も非限界動詞も逆接ナガラ節を構成することができるが、非限界動詞がパーフェクトを表すには、限界点を付加し、ひとまとまりの動きとして捉えられるような文脈が必要となる。

aspectto をどのように捉えるかは、ナガラ節の意味の認識に大きく関わるものである。第4章では日本語母語話者の aspectto 認識について論じた。日本語のバリエーションには、性差、世代差、地域差などがあり、aspectto に関しては共通語と西日本方言とで aspectto 体系が異なることが知られている。しかし、このような異なる aspectto 体系をもつ西日本方言話者の共通語使用が、東京方言話者と違いがあるのかといった点については、まだ研究されていない。

本研究では、方言によって共通語形式であるナガラ節、テルトコ形の aspectto 認識が異なるのではないか、という仮説を立てて調査を行った。その結果、例えば、東京方言では「座る、立つ、乗る」+ナガラは結果維持の局面を捉えるが、熊本・高知方言では、進行の局面を表すことができることがわかった。これらの動詞は限界動詞であっても動作・変化の進行という動的局面を捉えることが可能動詞である。このように、熊本・高知方言話者と東京方言話者では、共通語使用場面で、aspectto 認識に違いがあることを確認した。

2 項対立の aspectto 体系をもつ東京方言と 3 項対立の熊本・高知方言との間に見られた相違は、熊本・高知方言のヨル形式が、限界動詞の運動の局面を捉えることの影響によるものであると考えられる。

第5章では、コーパスを利用して、ナガラ文の使用分析を行い、さらに、付帯状況という用法をもつテ節との置き換えの可否を通して、ナガラ節、テ節の aspekto 的特徴について論じた。また、日本語学習者の誤用分析に見られる、付帯状況ナガラの使用条件について分析した。

テ節の動詞が「動作継続・結果継続維持・反復」という aspectto 性を持つとき、テ節は「付帯状況」を表すが、「顔を洗って、ごはんを食べる」のような完成性を持つと、継起を表す。aspectto と意味の関係は表裏一体で、テ節が完成という aspectto 的特徴を持っていない場合、継起の意味は成立しないし、継起の用法が成立するためにはテ節は完成でなければならない。

テとナガラでは動詞に接続した場合、取り出される動詞の局面は異なり、意味、用法も異なる。接続形式によって取り出される aspectto 的特徴は、その形式ごとに異

なるが、取り出される局面が、動詞の種類によって限定されていること、アスペクト的特徴と、意味、用法が相関しているという点については、共通しているといえることができる。

第6章では、限界動詞の運動局面の焦点化という観点から「徐々に」「～はじめる」「ヤスイ・ニクイ」「ナガラ」について考察した。ヤスイ・ニクイとナガラは、動詞のどの局面を取り出すのかという点では違いが見られるが、それぞれの意味用法とアスペクト的特徴が相関しているという点で、共通している。

アスペクトに関わる問題を、動詞が本来持っている語彙アスペクトと、文を構成する要素によって引き出される従属節のアスペクトという二つの視点で、分析を進めてきた。語彙アスペクトは、副詞や接続形式の特性によって、引き出されるアスペクトの局面が異なる。本研究では、ナガラ、テを中心に考察を進めたが、さらに、範囲を広げ、さまざまな表現形式について、分析を進める必要がある。

## 論文評価

本論文では、ナガラ節の aspekto の本質を解明するため、西日本方言の aspekto 体系をさぐり、動詞の持つ語彙的 aspekto の西日本方言話者のとらえ方を調査し、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語学習者作文コーパス』も丹念に分析した。また、限界動詞の運動局面の焦点化という観点から「徐々に」「～はじめる」「～ヤスイ」「～クイ」についても考察をくわえている。

我々人類の現実把握の仕方を二分すれば、時間的と空間的となろう。その時間的な現実把握のあり方として、テンスと aspekto があげられる。テンスは発話時点を起点とした時間的把握であり、aspectto は「出来事の時間的展開性（内的時間）の把握の仕方の相違」を表す文法的カテゴリーだとされている。

日本語でテンスをあらわす言語要素は助動詞のタで、例えば、「きのう徹夜シタ」である。しかし、このタが典型的なテンスを示すのは主文の述部においてであって、「明日 20 分以上遅れて来タ人は、テストを受けることができません」では、発話の時点から解放され、「遅れて来る」ことと「テストを受ける」こととの前後関係を示している。前者を絶対的テンス、後者を相対的テンスと呼ぶ考え方もあるが、テンスを「発話時点を起点とした時間的把握」だとする限り、この考え方は容認されない。では、後者は aspekto なのか。

前後関係を示すということでは、「タクシス」という概念にふれなければならない。「見タ、聞いタ、笑ッタ」はミル、キク、ワラウという動作が時系列にそって発生したことをしめすが、「見テイル、聞いテイル、笑ッテイル」はこれらの動作が一度に発生していることをしめす。この言語現象を「出来事の時間的展開性（内的時間）の把握の仕方の相違」をしめす機能の作用によると説明することの妥当性には検証が必要である。

本研究では、aspectto を動詞の語彙的意味の一部ととらえているが、名詞にも aspectto という文法カテゴリーを認める立場がある。たとえば、「きのう」には格助詞のニがつかず、発話時点との関連でその指示対象を明確化する。一方、「2 月 25 日」を発話中で運用する場合には格助詞ニを要求し、発話時という基点からは解放されている。

Bernard Comrie、金田一春彦、工藤真由美、他にも数多くの文法家が aspectto 論を展開しているがそれぞれの用語、aspectto のとらえ方はまちまちである。しかし、言語における時の表現に、時間軸上に基点を必要とするものと、それにしぼられない時のとらえ方が必要なことは明らかであり、テンスではない時の概念は不可欠である。本研究は、その時の概念の謎を解き明かす一つの鍵となる可能性を秘めている。

予備論文が提出され、内部審査委員 3 名が議論し、問題点を洗い出した。本論文提

出までの短い期間に、それらの問題を解消し、論文としての精度と密度をあげた。

今後、書きことばで使われる「〜ツツ」、逆接の「〜ケレドモ」「〜ノニ」などと「〜ナガラ」との共通点と相違点とに関する考察、さらに、主文におけるアスペクトをふくめた時の表現すべてに関する考察を深め、日本語のアスペクト研究を牽引する研究が求められる。

本論文は、学習者のために日本語の真理を極めようという立場を一貫して保持したことで、先行研究の理論的枠組みや記述をいくつかの点で乗り越え、日本語と言語理論の本質にせまる成果をあげている。

外部から招いた審査員も含め学位審査委員会は、以下の成果を高く評価する。

1. スルーシテイルといった形態論的な対立に基づくアスペクト研究から、動詞に内在する意味的アスペクトに踏み込んだ。
2. 従来アスペクト研究の中心であった主文述部のアスペクトから、従属節のアスペクトに踏み込んだ。
3. ナガラ文の成立の可否と、そのナガラ文が同時を示すか逆接を示すかの使い分けをアスペクトの観点から記述し、それに成功した。

「文学研究科日本語日本文学専攻博士後期課程学位申請論文における審査および学位授与の決定にかかる基準について」の審査基準を満たしており、博士（文学）の学位授与が適当であると判断する。